藻類 Jpn. J. Phycol. (Sôrui) 56: 233–236, November 10, 2008

北山太樹：海藻の和名における仮名遣いの問題

「イワズタ」と「イワヅタ」,「モズク」と「モヅク」,どちらを使うべきか。海藻の和名に見られる仮名遣い（仮名の綴字）の不統一問題について，前号誌上にてアンケートを行った（「藻類」第 56 巻 2 号，p. 153)。比較のため，淡水藻の「ミカズ（ヅ）キモ」についても質問を設けた。57 人(葉書 47 人,メール 9 人,口頭 1 人)から回答があった。結果を図 1 に示す。今回の結果からは「イワヅタ」と「モズク」に軍配があがった。これをもって「イワヅタ」「モズク」に決定というわけにはいかないけれども，筆者自身はとりあえず今後しばらく「イワヅタ」「モズク」を使うことにした。

本稿では，このアンケート結果を受け，海藻和名の仮名遣い表記になぜこのような不統一が生じているのかを考察したい。回答の中に特定の文献を根拠に挙げるものがあったので，考察の一助として「イワズ(ヅ)タ」を載せている明治期以降の主な藻学関係書籍等から「イワズ（ヅ）タ」と「モズ（ヅ）ク」の変遷を調べてみた（表 1)。

なお，この問題に関し，学術審議会学術用語分科会植物学用語専門委員会のメンバーとして植物学用語の選定に関わられ，この問題に関心の深い金井弘夫博士（元国立科学博物館植物研究部長）と，かねてより「モズク・モヅク」の表記について問題意識を持たれていた新村　巌博士（元鹿児島県水産試験場生物部長）のお二人にご寄稿をお願いした（本誌 pp. 231–232)。本稿と併せてお読みいただきたい（以下，敬称・敬語を略す)。

「イワズタ」と「イワヅタ」

「イワズタ」が 21.1%,「イワヅタ」が 73.7%と，イワヅタ派がイワズタ派を圧倒した。「その他」も若干みられた（1.8%）が，そのなかに濁らない「イワツタ」,もしくは旧かなづかい(歴史的仮名遣い)の「イハヅタ」「イハツタ」を書いた回答はなかった。

イワヅタ派からは，名前は意味を持ち，それが読み取れる表記が好ましいという意見が多くあった：「藻の名前にも歴史があり，語源がありますから，それを大切にし，本来の名前の意味を見失わない事が大切だと思います」(濱田　仁),「命名者はかならずその海藻にもっともふさわしい意味を持った和名を付けているはずです。その意味で和名は単なる識別記号ではなく，固有名詞と考えます」(川嶋昭二)。このように「イワヅタ」が「岩蔦」であることを意識して使う人が「蔦」を「ズタ」と書くことに心理的抵抗を感じることは理解しやすい。表 1 が示すように，この 10 年こそ「イワズタ」と「イワヅタ」が拮抗しているものの，前世紀中は「イワヅタ」が主流であった。

誰しもが認めるように「イワズ（ヅ）タ」の語源は「岩蔦」である。しかし，それは古語にはなく，明治期につくられた和名のための新語である*1。岡村金太郎が松村任三・三好　學*2（1900）編纂の「新撰日本植物圖説 第 1 巻 下等隠花類部」のなかで "*Caulerpa anceps* Harvey" を「へらいはづた（新稱)」, "Caulerpaceae" を「いはづた科」としたのが仮名書きとしては初出らしい*3 (表 1)。後年，岡村自身が「元来イワヅタ屬（*Caulerpa*）と云ふ名からが，海の草の名としては少し無理の様だが，ツタの様に岩の上に匐ふから，そう名付けたので，其イワヅタの一種で，黒木御所に因んで付けた名であるから，クロキイワヅタと云ふべきだが餘り長いから，クロキヅタと命名したのである」(岡村 1926）と述べていて，「イワヅタ」の意味については議論の余地がないものと思われる。

ところで,金井 (本誌 p. 231) が疑問を呈したようにイワヅタ派は「イハヅタ」を使わない。これは，イワヅタ（語源）派が旧かなづかい主義者ではないからであるが，じつは岡村自身が「いわづた」と表記していたことも大きく影響している。「岩」は歴史的仮名遣いで「いは」と表記されるにもかかわらず,なぜか岡村は「いわ」を使うことが多かった*4。日本藻類名彙 (1902 年) 以降の岡村はやや表音主義的であったようで，一度成立させた和名から語源を読みとらせることにこだわってはいなかったように見受けられる。同時代にあって「イワ」を引用しなければならなかった遠藤吉三郎の戸惑いが表 1 からうかがえる。

昭和初期まで，岡村とその薫陶をうけた藻学者らが「イワヅタ」を使い，それ以外の生物学者の「イハヅタ」と拮抗する状態が続いた。しかし,その対立は意外な形で決着をみる。敗戦直後の 1946 年（昭和 21 年）11 月 16 日に「現代かなづかい」(内閣告示 33 号）が公布され,係助詞以外の「ワ」音が「ワ」と表記されることになって「岩」の仮名は「いわ」に統一されたのである。この「現代かなづかい」は，歴史的仮名遣いへの遠慮から，いわゆる「四つ仮名」を容認した点で後の「現代仮名遣い」と同じであったが，その欠点を補うべく語例の豊富な「細則」を備え，二語連合の「づ」の例として「つた（蔦)：うるしづた，おにづた，きづた，ひめづた，ふゆづた」を挙げていた。

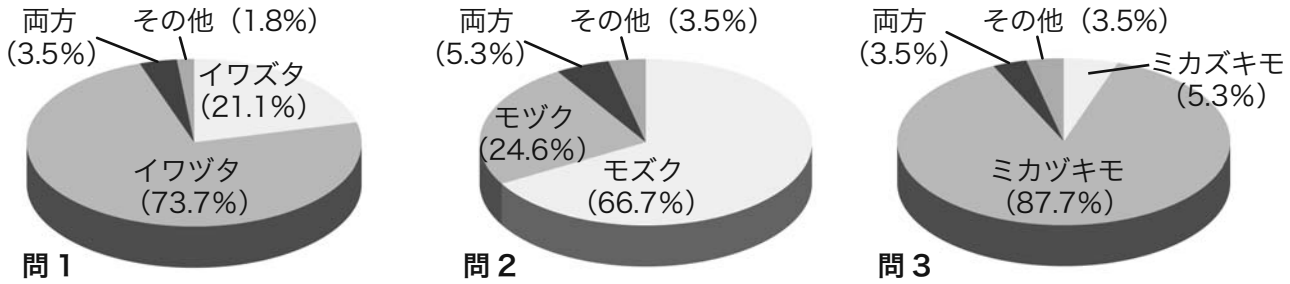

図 1　アンケート結果。質問文は前号（第 56 巻 2 号 p. 153）を参照。「その他」の内容は不明。

表 1　岩蔦を載せた主な藻学関係書籍等にみられる岩蔦と海蘊の仮名表記 *

発行年	書名（著者）〈編者〉〔訳者〕	岩蔦	海蘊
1900	新撰日本植物圖説 第 1 巻〈松村・三好〉	イハヅタ	—
1902	日本藻類名彙（岡村）	イワヅタ	モヅク
1903	日本有用海産植物（遠藤）	イワズタ・イワヅタ	モズク・モヅク
1906	實驗隠花植物學（遠藤）	イワヅタ・イハヅタ	モヅク
1906	植物系統學（池野）	イハヅタ	—
1910	内外普通植物誌 下等植物篇（齊田）	イハヅタ	モヅク
1911	海産植物學（遠藤）	イハヅタ	モヅク
1911	植物學各論 隠花部（安田）	イハヅタ	モヅク
1911	最新植物學講義 上卷（三好）	（ウミカウカイ）	—
1912	日本藻類圖説 第 2 巻（岡村）	—	モヅク
1913	日本藻類圖説 第 3 巻（岡村）	イワヅタ	—
1916	日本藻類名彙 第 2 版（岡村）	イワヅタ	モヅク
1917	最新圖説内外植物誌〈齊田・佐藤〉	イハヅタ	モヅク
1925	應用植物學各論 上卷（末松）	イハヅタ	—
1930	藻類系統學（岡村）	イワヅタ	モヅク
1930	大綱日本植物分類學（本田・向坂）	イハヅタ	モヅク
1933	水産植物學（殖田）	イワヅタ	モヅク
1934	原色日本海藻圖譜（東）	イハヅタ	モヅク
1934	原色海藻圖譜（岡田）	イワヅタ	モヅク
1934	植物形態學（小倉）	イハヅタ	—
1935	海藻の化學（大谷・富士川）	イハヅタ	モヅク
1935	分類植物學 上卷（山田ら）	イハヅタ	モヅク
1936	日本海藻誌（岡村）	イワヅタ	モヅク
1936	綜合新植物圖説（村越）	イワズタ	モズク
1942	植物學用語新辭典 英和・獨和對譯（三輪・池田）	イハヅタ	—
	――――現代かなづかい（内閣告示 1946）――――		
1949	基礎植物學（小野ら）	イワズタ	モズク
1950	最新生物學辞典 増補版（柘植ら）	イワズタ	モズク
1953	携帯図鑑 蝦蟹介藻 500 種（大島・新崎）	イワヅタ	モヅク
1954	植物組織學（猪野）	イワヅタ	モズク
1956	学術用語集 植物学編（文部省）	イワヅタ	モズク
1956	有用植物分類学（佐藤）	イワヅタ	モズク
1956	原色日本海藻図鑑（瀬川）	イワヅタ	モズク
1959	藻類学総説（広瀬）	イワズタ	モズク
1960	岩波生物学辞典 第 1 版〈山田ら〉	イワヅタ	モズク
1961	牧野新日本植物圖鑑〈前川ら〉	イワヅタ	モズク
1964	原色海藻検索図鑑（新崎）	イワヅタ	モズク
1966	現代生物学大系第 5 巻 下等植物 A〈堀川ら〉	イワヅタ	—
1967	現代生物学大系第 6 巻 下等植物 B〈堀川ら〉	—	モズク
1968	増補 植物の事典〈佐竹ら〉	イワヅタ	モズク
1970	標準原色図鑑全集 海藻・海浜植物（千原）	イワヅタ	モヅク
1970	食用植物図説〈女子栄養大学出版部〉	イワヅタ	モヅク
1971	新編植物系統学概論（川崎）	イワヅタ	モズク
1974	植物系統進化学〈井上〉	イワジタ・イワヅタ	—
1976	海洋科学基礎講座 5 海藻・ベントス（新崎ら）	イワヅタ	モズク
1977	岩波生物学辞典 第 2 版〈山田ら〉	イワヅタ	モズク
1979	藻類研究法〈西澤・千原〉	イワヅタ	モヅク
1981	学研生物図鑑 海藻（千原）	イワヅタ	モヅク
1983	岩波生物学辞典 第 3 版〈山田ら〉	イワヅタ	モズク
1983	植物系統分類の基礎〈山岸〉	イワズタ・イワヅタ	モズク
1985	日本産海藻目録 I. 緑藻と褐藻（吉田ら）	イワヅタ	モズク
	――――現代仮名遣い（内閣告示 1986）――――		
1986	藻類の生態〈秋山ら〉	イワヅタ	モズク
1987	水産養殖学講座 10. 海藻資源養殖学（德田ら）	イワヅタ	モヅク
1987	図解・生物界ガイド五つの王国〔川島・根平〕	イワズタ・イワヅタ	—
1989	世界有用植物事典〈掘田ら〉	イワヅタ	モズク
1990	学術用語集植物学編（増訂版）（文部省・日本植物学会）	イワズタ	モズク
1990	日本産海藻目録（1990 年改訂版）（吉田ら）	イワヅタ	モズク
1991	図鑑 海藻の生態と藻礁（德田ら）	イワヅタ	モヅク
1992	水産学シリーズ 88 食用藻類の栽培〈三浦〉	イワヅタ	モズク
1993	藻類の生活史集成 第 2 巻 褐藻・紅藻類〈堀〉	—	モズク
1994	藻類の生活史集成 第 1 巻 緑色藻類〈堀〉	イワヅタ	—
1994	山渓フィールドブックス サンゴ礁の生きもの〈奥谷〉	イワヅタ	モズク
1995	日本産海藻目録（1995 年改訂版）（吉田ら）	イワヅタ	モズク
1996	岩波生物学辞典 第 4 版〈八杉ら〉	イワヅタ	モヅク
1996	海藻およびー—カラフルな色彩の謎—（横浜・野田）	イワヅタ	—
1997	藻類多様性の生物学〈千原〉	イワヅタ	モヅク
1997	原生生物の世界（丸山）	イワヅタ	—
1998	新日本海藻誌 日本産海藻類総覧（吉田）	イワズタ	モズク
1999	藻類の多様性と系統〈千原〉	イワヅタ	モヅク
2000	日本産海藻目録（2000 年改訂版）（吉田ら）	イワズタ	モズク
2000	藻類学—実験・実習〈有賀ら〉	イワヅタ	モズク
2000	食材魚貝大百科 第 4 巻（田中ら）	イワヅタ	モズク
2002	小学館の図鑑 NEO 植物〈門田〉	イワヅタ	モズク
2002	フィールドベスト図鑑 日本の海藻（千原）	イワヅタ	モヅク
2004	有用海藻誌〈大野〉	イワズタ	モズク
2004	日本の海藻 基本 284（田中・中村）	イワズタ	モズク
2005	日本産海藻目録（2005 年改訂版）（吉田ら）	イワズタ	モズク
2006	藻類 30 億年の自然史（井上）	イワヅタ	—

* ひらがなで書かれたものもカタカナで表記した。「○○イワズタ」「○○モズク」の類は拾わなかった。

従って，「現代かなづかい」では「岩蔦」は「いわづた」と表記される。しかし，「現代かなづかい」は 1986 年に廃止されてしまう。

さて，1986 年（昭和 61 年）7 月 1 日（内閣告示第 1 号）公布の「現代仮名遣い」に従うイワヅタ派（従う必要なしとするイワヅタ派もある。後述）が論拠にしうるのは，その「本文」に設けられた例外規定である。「現代仮名遣い」は，原則（第 1）として「ぢ」と「づ」の使用を「表記の慣習による特例（第 2）」に示す場合に限った（本誌 p. 232 を参照）。その特例には 2 項目が設けられた：(1) 同音の連呼によって生じた「ぢ」「づ」。(2) 二語の連合によって生じた「ぢ」「づ」。「イワヅタ」はとりあえずこの (2) の例外規定にあてはまる。(1) には「ちぢみ（縮）」「つづみ（鼓）」が例として挙げられ，それぞれ「チヂミコンブ（縮み昆布）」「ツヅミモ（鼓藻）」を支持するのに対し，(2) では「みかづき（三日月）」や「ひぢりめん（緋縮緬）」が例に挙げられており，今回のアンケートで 87.7%が「ヅ」とした「ミカヅキモ（三日月藻）」や紅藻の「ヒヂリメン」の強力な根拠となっている。しかし，その裏返しで，例に挙がらなかった「岩蔦」を「イワヅタ」とする根拠が薄弱となってしまったようだ。しかも，(2) には，例外規定中の例外規定とも呼ぶべきものが設けられ難解さを増している：

> なお，次のような語については，現代語の意識では一般に二語に分解しにくいもの等として，それぞれ「じ」「ず」を用いて書くことを本則とし，「せかいじゅう」「いなづま」のように「ぢ」「づ」を用いて書くこともできるものとする。

つまり，「イワズ（ヅ）タ」が「次のような語」に相当するならば，二語に分解しにくいのでその本則では「イワズタ」で，しかし「イワヅタ」でも可という解釈ができそうだが，「次のような語」は「世界中」「稲妻」を含めた 23 語の例が挙げられているだけで，その定義は用意されてはいない。現代語の意識とは実際どのようなものであるかも量りがたい。結局，「現代仮名遣い」では「岩蔦」の読みを確定できないといわざるをえない（「仮名遣い」の読みも確定できないので漢字表記にしているのかもしれないと言ったら邪推であろうか）。

一方，イワヅタ派の中にはこのように優柔不断な「現代仮名遣い」に従う必要はないという見解もみられた：「生物名には意味があって仮名遣いがあるので，「現代仮名遣い」といえども例外的に扱うことが望ましく，再度見直すべきと考える」（喜田和四郎）。そもそも「現代仮名遣い」の「前書き 3」に「この仮名遣いは，科学，技術，芸術その他の各種専門分野や個々人の表記にまで及ぼそうとするものではない」と書かれ，「前書き 4」には「固有名詞などでこれによりがたいものは除く」ことが述べられているので，国語審議会（2001 年廃止）や文化審議会の立場としては，生物の和名をどう表記するかは与り知らぬところといってよいかもしれない。

むしろ，和名表記にいくらかでも強制力を持つものがあるとすれば，1990 年（平成 2 年）に刊行された文部省・日本植物学会共編「学術用語集 植物学編（増訂版）」（以下，「用語集（増）」）であろう*5。その審査基準をみると，「3. 審査基準の原則 (5)」に「漢字・仮名遣い・送り仮名その他の表記に関しては，内閣告示又はしかるべき基準に従っている」と書かれ，その [解説] に「仮名遣いは，「現代仮名遣い」（昭和 61 年 7 月 1 日 内閣告示第 1 号）によること」とある。「用語集(増)」をめくってみよう。「参考」の部に「植物科名の標準和名」が 47 頁にわたって列記されている。“Caulerpaceae” は「イワズタ」科（用語

集（p. 622）である。つまり，当時の学術審議会と植物学会は，4 年前に公布された「科学の表記にまで及ばない」はずの「現代仮名遣い」の枠内で「イワズタ」を採用する形をとったわけである*6。従って,「学術用語」としては「イワズタ」が正解となる（ちなみに 1956 年に発行された初版の「学術用語集植物学編」は「現代かなづかい」を遵守して「イワヅタ科」としていた)。とはいえ,この「用語集（増)」は「現代仮名遣い」より徹底した表音主義を採用しており,「ヅ」が全く使われていない。“Closteriaceae” は「ミカズキモ」科（p. 624）と表記されている。金井（本誌 p. 231）が述べるように，ルールは単純なほど良く，和名における「ヅ」を禁字にしてすべて「ズ」とすれば表記の揺れは解消する。このような方針は図書館ではすでに実行されている。社団法人日本図書館協会編「日本目録規則 1987 年版」の「標目付則 1 片かな表記法」には「二語の連合または同音の連呼によって生じた「ヂ」「ヅ」は「ジ」「ズ」と表記する」と明記されている。膨大な数の書名を管理するために不可欠なルールであり,「現代仮名遣い」が歴史的仮名遣いに遠慮して踏み込めなかった部分である。同様に「用語集（増)」の表記方法は合理的であるといえる。

しかしながら,「現代仮名遣い」が実際に適用される範囲はかなり広いので，それを上回る表音主義は，日本目録規則がそうであるように一般へは受け入れられにくく，用語そのものの一般社会への普及を妨げる恐れがある。できれば図書館員や生物学者以外の人々にも齟齬なく使ってもらえる表記方法が望ましい。とりわけ多くの人が使う国語辞書に，そのまま載せることができないような表記は不便である。たとえば「みかづき（三日月)」と「みかずきも（三日月藻)」が併存する項立ては考えにくい（「岩波広辞苑」だけは初版から第 3 版まで「みかずき」を採用していたが,「現代仮名遣い」公布後の第 4 版から「ミカヅキ」となった)。「岩蔦」を載せている辞書はまだそう多くないものの，載せている辞書では，すべて「いわづた」である*7。これは「現代かなづかい」時代の名残とも思われるが,「いわずた」では,「いわづな（岩綱)」より「いわず（言わず)」のそばに並んでしまうのは言わずもがなである。また，毎日のようにこの問題に直面する新聞社では,「現代仮名遣い」を改良した，各社独自の正書法を定めることで紙面上の表記の不統一を回避している。毎日新聞用語集（毎日新聞社 2007）の「現代仮名遣いの要領」は「づ」の使い方に「づた（蔦)」を明記しており,「いわづた」が紙面に載る。

イワズタ派からの回答の中には,当誌「藻類」に掲載されている「日本産海藻目録」(以下,「海藻目録」)に従うというコメントが散見された:「新日本海藻誌（吉田 1998）および 2000 年以降の日本海藻目録などに従っています」(輪島　毅)。ひとつの達見である。「海藻目録」は，吉田忠生ら（1985, 1990, 1995, 2000, 2005）の長年にわたる尽力によって 5 年ごとに改訂版が出されてきた。事実上，海藻の和名表記についての指針の役割を担っており，対外的に日本藻類学会の公式見解として用いられるケースもあるらしい。和名に関し「海藻目録」は,「すでに発表されているものを採用」（吉田ら 2005, p. 179）し，とくに目録上で議論は行わない柔軟な編集方針を採っているようである*8。いずれの表記を採るにしても「海藻目録」を学会推奨の表記として内外に示すことが理想的と思われ，今回すでにそのような理解を持つ会員も少なくないことがうかがえた。「イワズ(ヅ)タ」や後述の「モズ(ヅ)ク」以外にも仮名遣いに揺れのある和名*9 があるので，とりあえずは最新の「海藻目録」の表記を標準和名に位置づけておき，時機をみて新村提言（本誌 p. 232）のように検討を行うのがよいだろう。

「モズク」と「モヅク」

「モズク」(66.7%）が過半数に達した。「イワズタ」を使う人で「モヅク」を選ぶ人はいなかったのに対し，「イワヅタ」を使う人の 45.6%が「モズク」を選んだため,「イワズ（ヅ）タ」と逆の結果になった。以下,「イワズ（ヅ）タ」と重複するところを割愛して述べる。

「モズ（ヅ）ク」の語源は諸説ある。主要なものを挙げると: 1)「藻付く，藻着く」, 2)「藻屑（モクヅ)」の倒置，3)「藻次芽（モニツグメ)」,4)「藻束（モツカネ)」,5)「藻（モ）[休字]（ツ）雲（ク)」(「語源辞典 植物編」東京堂出版 2001, p. 255 ;「小学館日本語源大辞典」小学館 2005, p. 1098)。これらの語源説を表記に反映させるなら「モヅク」であることは論を待たない。しかし,「岩蔦」の場合とは事情が異なり,「もづく」は万葉仮名の時代から使われてきた言葉*10 で,筆者のような素人の手に負えるものではないので,いずれ当誌「民俗藻類学の旅」に本格的な論考がなされることを期待したい。

おそらく本草学の時代から戦前（1930 年代）まで長く「モヅク」であったと思われるが,戦後は「モズク」が席捲する（表 1)。これは，終戦（昭和 21 年）翌年に公布の「現代かなづかい」の強制力によるものである（本誌 p. 232 を参照)。「現代かなづかい」は詳細な細則を備え，そのなかで「三，分析しがたい語中の「じ」「ず」の例」として「もずく」を明記した。従って,「現代かなづかい」においては「モズク」と書くのが正解となる。しかし,1986 年の「現代かなづかい」廃止でよりどころが失われ,「モヅク」が徐々に復権しているものと思われる（ただし，語源派の重鎮，千原光雄は 1960 年代から一貫して「モヅク」を使用している)。「現代かなづかい」が国語辞典に与えた影響は甚大であったようで，吉田（本誌 55 巻 3 号 p. 234）の指摘のように，2000 年以降に出版されているものを調べた限り例外なく「もずく」となっている*11。「毎日新聞用語集」や「五訂増補日本食品標準成分表*12」(文部科学省科学技術・学術審議会資源調査分科会 2005）も「もずく」，インターネット検索では「モズク」30 万 5 千件に対し,「モヅク」は 518 件であった（Google，2008 年 9 月 28 日現在）*13。いずれの影響か，水産業でも「モズク」が定着しているらしい（本誌，p. 232)。歴史は浅いけれども「モズク」を標準和名とするなら，一般名との使い分けに悩む必要がないだろう。

結論

和名「イワズ（ヅ）タ」と「モズ（ヅ）ク」における表記の不統一は,「現代仮名遣い」の複雑さ･曖昧さに起因する。また，今回のアンケート結果を含め学会内外で「イワヅタ」「モズク」が優勢であるのは「現代かなづかい」の名残と考えられる。和名といえども日本語として書かれる以上，学術用語の範囲だけで合理性や利便性を議論していずれかに決めても定着することは望めそうにない。「用語集（増)」の試みが良い例で，じつは「動物学編（増訂版)」(文部省・日本動物学会 1988）においても同じ問題が生じている*14。「現代仮名遣い」が改善されるまではこの問題が根本的な解決をみることはないだろう。

そもそも「ズ」と「ヅ」の書き分けがあるのは，古の時代に両者の音が異なっていたからである。鎌倉時代までは広い地域において「ズ」

は摩擦音,「ヅ」は破裂音で発音されていたらしく，室町時代のキリシタン教義書「どちりいなきりしたん」にも「ズ」音が“zu”,「ヅ」音は“zzu”と書かれて区別されている（萩野 2007 p. 90)。今日でも四国と九州に「ズ」音と「ヅ」音の区別を残す方言がいくつか知られ，たとえば土佐弁には「ズ」と「ヅ」の使い分けがあるらしい。大野正夫（私信）によれば「高知市内の者や東京弁を日常的に使う者は区別ができなくなっているものの，中年以上の者や漁村・農村で土佐弁だけで生活している者は区別ができる」そうである。「モズク」と「モヅク」をどちらかに統一したいというのは，土佐の漁師からみれば滑稽な話であって,「モズク」と読むなら「モズク」,「モヅク」と読むなら「モヅク」だろうということに過ぎないのかもしれない。もし，土佐弁が標準語になっていたら本問題は発生しなかっただろう。

言葉は「生き物」にもたとえられる。生きているならそれを使う人の思想や事情によって多様な表記があるのも自然なことである。あまりに異なると齟齬をきたすが，少々であれば容認するのがかえって効率的かもしれない。学名のように厳格なルールを設けてしまっては和名の持つ良さを損なう虞もある。問題提議した者がこのようなことを言うのは自家撞着の感を拭えないが,「ズ」「ヅ」を含め，海藻和名に関しては，まずは最新の「海藻目録」を学会指針としておき，その上で最終的には個人の好みと責任にまかせざるをえないと思う。

アンケートに協力いただいた会員諸賢に深くお礼を申し上げる。また，土佐弁について情報をくださった大野正夫先生に感謝する。本稿は，金井弘夫先生と新村　巌先生のご原稿を拝読してから後出しで執筆したもので，その点，両先生にはお礼とお詫びを申し上げたい。千原光雄先生には，企画当初より問題の背景や文献等についてご指導をいただいた。感謝の念に堪えない。

*1) 萬葉集の訳文にみられる「石蔦」(例：巻 12，3067）は「いはつな」と読み，テイカカズラのこととされる（多くの辞書が「石綱」。小学館日本国語大辞典は「岩綱・岩蔦」)。「冨山房大日本國語辭典（上田・松井 1915)」には「いはつた（岩蘿)」の項があり,「岩の上に這ふつた」とある。

*2) じつは岡村より前に松村（1895）が“*Caulerpa sedoides*”に「キクノリ」と付記しており，これが“*Caulerpa*”の種に与えられた最初の和名と考えられる（長崎の地方名?)。この種名は，牧野富太郎らが土佐で採集した標品を岡村 (1894) が仮同定したもので,岡村は和名を付けなかった。三好も後年,“*Caulerpa*”を「うみかうかい」,“*Caulerpa pilifera*”を「うみかうがいノ一種」とした（三好 1911，p. 379)。「海笄」(笄は髪をかきあげる道具）の意か。

*3) 前年の Kuroiwa（1899）に，“Sennari-dzuta (H. K. nom. nov.)”および“Saihai-dzuta (Okam. nom. nov.)”がみられる。このことから「千成り蔦」「采配蔦」が「岩」を略したものではなく，“Caulerpaceae”に和名を用意する必要（顕花植物に「ツタ」があるため）に迫られて「岩蔦」という着想を得たという可能性もある。ただし，同年に岡村が発行した「日本海藻標品」の No. 47 のラベルに“Hera-iwadzuta”がみられる。

*4)「岩」「皮」「団扇」が旧かなづかいで「いは」「かは」「うちは」と書かれるところ（ただし,「泡」「鰯」「皺」などは「あわ」「いわし」「しわ」)，岡村は「いわ」「かわ」「うちわ」と書きあらわすことが多かった。たとえば「いわひげ」「いわのかわ」「うみうちわ」。日本藻類名彙（1902）でヘボン式ローマ字による和名索引を採用したことが影響したものか。しかし,「川」は「かは」を採り，Kawamozuku と Kawa-nori は齋田功太郎，矢田部良吉による原表記のまま「かはもづく」「かはのり」としている（岡村 1902，1916，1936 など)。なお，明治期，文をカタカナで書くときは和名をひらがな表記するのが普通であった。

*5) 昭和 58 年（1983 年）11 月に文部省学術国際局情報図書館課から日本植物学会会長（当時 沼田　眞会長）への要請で始められた「植物学学術用語標準化の調査研究」で着手され，昭和 61 年（1986 年）11 月に文部省学術審議会学術用語分科会の審査を経て承認された。

*6) この点について，本稿脱稿後「これは誤認です。科の標準和名は，日本植物学会が独自に選定したものを付録として付け加えたもので，学術用語の選定とは関係ありません」（金井弘夫，私信）とのご指摘をいただいた。

*7)「いわづた」を載せた国語辞書：岩波広辞苑第 6 版（2008)；三省堂大辞林第 1 版（1988)，第 2 版（1995)，第 3 版（2006);三省堂辞林 21（1993);三省堂新辞林（1999);講談社日本語大辞典第 1 版（1989),第 2 版（1995)。

*8) 表 1 に示すように 1995 年版までは「イワヅタ」で，2000 年版から学術用語集と同じく「イワズタ」を採用している。今世紀に入ってから「イワズタ」が増えているのはこの影響が大きいと考えられる。

*9)「イワズタ」(クビレズタ，クロキズタ，ヒメズタなどを含む）と「モズク」(イシモズク，アケボノモズク，ベニモズク他も含む）以外の海藻和名で，仮名遣いに揺れのあるものを「海藻目録」(吉田ら 2005）から列記する：**【ズ・ヅ】モサズキ**　岡村･遠藤は「モサヅキ」。「藻桟敷」?**【ヂ･ジ】チヂミヒメイチョウ・チジミコンブ・チジレアカバ**　「チヂミ」は同音連呼の「ぢ」が「現代仮名遣い」の例外規定にあたる。「縮み姫銀杏」「縮み昆布」「縮れ赤葉」で統一が望ましい。**ヒヂリメン**　「現代仮名遣い」は二語連合による「ぢ」の例に「ひぢりめん（緋縮緬)」を挙げる。**【オオギ･オウギ】ウスバオオギ・フタエオオギ・ヤレオオギ・ハイオオギ・シマオオギ・エツキシマオオギ・ヒメオオギイトグサ・ヒオウギ**　「ヒオウギ（緋扇)」とそれ以外とで統一が望ましい。旧かなづかいの「あふぎ（扇)」は「現代仮名遣い」で「おうぎ」となるので「…オウギ」とすべきか。**【ホウズキ･ホオズキ･ホオヅキ】ツクシホウズキ**　「酸漿･頬付き」は，旧かなづかいでは「ホホヅキ（酸漿）」と書かれるが,「現代仮名遣い」では二語に分解しにくい例として「ほおずき」が挙げられ「ほおづき」も可とされる。「ツクシホオズキ」もしくは「ツクシホオヅキ」とすべきか。岡村 (1902）の「つくしほうづき」を活かせば「ツクシホウヅキ」。**【その他】**以下は，実際の表記に揺れがなく定着しているので問題外ではあるが，触れておく。**タマハハキモク**　旧かなづかいの「ははき」は「現代仮名遣い」では「ほうき」。従って「タマハハキモク（玉箒もく)」は本来は「タマホウキモク」となる（顕花植物には「ホウキギク」,菌類には「ホウキタケ」がみられる)。牧野 (1961) は，*Sargassum kjellmanianum* の和名を「ホウキモク」と表記する。**ヒビロウド・クロシオヒビロウド・ヒメヒビロウド・オキヒビロウド・ビロウドガラガラ**　「びらうど（天鵞絨)」は,「現代仮名遣い」ではカタカナが「ビロード」，ひらがなが「びろうど」になるが，これはひらがなに長音符号（ー）がなく，オ列の長音については原則「オ列の仮名に「う」を添える」とされるからである。従って「緋天鵞絨」はひらがなでは「ひびろうど」と表記されても，それを基にカタカナに変換して「ヒビロウド」とするのは「現代仮名遣い」上は正しくない（一般に，シダの天鵞絨羊歯は「ビロードシダ」，昆虫の天鵞絨天牛は「ビロードカミキリ」。しかし，岩波生物学辞典第 4 版は「ビロウドホウキタケ」を載せる)。なお，岡村はカタカナでも「ヒビラウド」と表記している（岡村 1934)。**ハーベイイワノカワ**　ひらがなにすると「はあべいいわのかわ」になる。

*10) 東大寺正倉院文書（740 年頃）に万葉仮名で「母豆久」(宮下 1974)。

*11) 2000 年以降の主な国語辞書：岩波広辞苑第 6 版（2008)，岩波国語辞典第 6 版（2000)，旺文社国語辞典第 10 版（2005)，角川新国語辞典第 116 版（2004)，学研現代新国語辞典第 3 版（2001)，講談社国語辞典第 3 版（2004)，三省堂大辞林第 3 版（2006)，三省堂新明解国語辞典第 6 版（2005)，小学館日本語新辞典（2002)，小学館日本国語大辞典第 2 版 (2001),集英社国語辞典第 2 版（2000),新潮現代国語辞典第 2 版（2000),大修館書店明鏡国語辞典（2002)。凡て「もずく」である。

*12) 五訂版から「くびれづた　生」を載せている。

*13)「イワズタ」(1,320 件）と「イワヅタ」(1,340 件）では互角である。以前は「イワヅタ」が優勢であったが，ここ数年「イワズタ」増加の傾向にある。とりわけインターネット上で大きな影響力を持つ Wikipedia が 2007 年 8 月 11 日に「イワヅタ」「クビレヅタ」から「イワズタ」「クビレズタ」に変更している。

*14) 学術用語集動物学編（増訂版）(1988）で「テズルモズル」とされた「手蔓縺（手蔓藻蔓)」は，岩波生物学辞典，岩波広辞苑，三省堂大辞林，講談社日本語大辞典などで「テヅルモヅル」と表記されている。

引用文献 (表 1 に示したものと辞書等の類を省略した)

萩野貞樹 2007. 旧かなづかひで書く日本語. 幻冬舎新書 048. 幻冬舎. pp. 230.
Kuroiwa, H. 1899. Provisional list of marine algae colected in Loochoo Islands determined by Dr. K. Okamura. Bot. Mag. Tokyo 13: 93–97.
松村任三 1895. 植物名彙. 丸善. 東京.
宮下　章 1974. ものと人間の文化史 11・海藻. 法政大学出版局. pp. 316.
文部科学省科学技術・学術審議会資源調査分科会 2005. 五訂増補日本食品標準成分表. 国立印刷局. 東京.
文部省・日本動物学会 1988. 学術用語集 動物学編（増訂版). 丸善. pp. 1122.
岡村金太郎 1894. 土佐産ノ海藻. 植物学雑誌 8: 489–495.
岡村金太郎 1926. 海藻漫談. 科学の知識 6: 1266–1269.
岡村金太郎 1934. 昭和八年夏各地海藻採集みやげ. 植物研究雑誌 9: 481–489.

（日本藻類学会和文誌編集部）